

子供評判記「布袋ほていぶくほ鑿」刊行の周辺

柏崎順子

歌舞伎といえは一般にはいわゆる大芝居を想起しよう。大芝居とは京都、大阪、江戸にあって官許を得、櫓を揚げて興行していた芝居である。大芝居での上演については、はやくから役者の評判記が出版され、年に一度ないしは二度の刊行がなされていた。形式は、それ以前からおこなはれていた遊女評判記の体裁にならったものであった。

時代が下るにしたがって、その芸評は次第に詳細になっていくのであって、芝居を享受する側の芸への関心の高まりの程をうかがいしることができるのである。

が、近世において、歌舞伎はこの大芝居のみが興行していたわけではない。各地の寺社の境内等で小規模な芝居興行が行われていたのであり、三都においても、大芝居の他にこうした小屋が存していた。

このように、大芝居以外で断続的に興行していたのに、江戸では小芝居と称されるもの、大阪では中芝居、小芝居の別があり、京都では寺社の多い事情があつて宮地芝居が方々でおこなわれ、大芝居を凌ぐ勢いの時期も長く続いている。

上方では義太夫が出て、近松がこれを盛りあげるようになった時点で浄瑠璃が主流となつていくのであり、そのような

時期の歌舞伎興行は停滞していた感がある。

その衰微甚だしかったのは、京都の芝居であった。宝曆五年（一七五五年）の評判記「役者刪家系」⁽¹⁾に、「近々年かぶき芝居へ何しか、京都斗不景氣にてはつきりと致さいで氣の毒、別してこの兩年、取かへ引かへ狂言出せ共、とかく諸人の愛敬すくなく、わずか三軒の芝居が替り目たびごとに休、一年中休むにかゝつて狂言をする間、何日程有たぞとゆびを折つてかぞへる間違な噂」とあるように、江戸中期の京都の大芝居は、大阪芝居の力を借りてかろうじて興行をおこなっている状態であった。

そのような中、大阪では子供芝居がにわかに興隆をみせている。先に述べたごとく大芝居の評判記が刊行されているなか、宝曆六年、子供役者の評判記がでた。大阪の書肆大和屋利兵衛から五月吉日付で出版される「布袋鑿」⁽²⁾である。

この子供芝居は元来、からくり人形の芝居をしていた竹田近江が前芸、あるいは間狂言としておこなっていたのをはじまりとするのであり、本格の役者以前の、芸も拙い幼い者が演じる余興的性格のものであった。

ところが文化文政の頃まで下ると、上方役者の多くはこの子供芝居から輩出するようになる。敵役として名を馳せた三世中村歌右衛門、五世市川団藏等も初め子供芝居で修業している。

よつてこの子供芝居の変遷の過程を明らかにすることは、上方の役者や劇壇の様子を知る上で、一つの手がかりとなると考えられるのである。ここでは、子供芝居が劇界で自己主張をはじめめる契機の一つとしてこの子供役者の評判記「布袋鑿」⁽³⁾をとりあげ、その後子供芝居が大芝居との関わりを持っていく端緒を明らかにしようとするものである。

この子供評判記が刊行された頃は、子供芝居は間狂言としてでなく、子供芝居のみの興行がおこなわれているらしく、それにもなつて子供役者の数も増えていたであろうことが想像されるのである。

それにして大芝居に出勤していた役者の評でこそ成立していた評判記が、子供役者を対象として成ったのは注目すべきことであろう。そして子供評判記はその後たびたび刊行されるようになる。守随憲治氏の『歌舞伎序説』⁽³⁾中の「役者評判記年表」には、「布袋騷」を入れて次の十二の子供評判記が紹介されている。

- * 宝曆六年五月 「子供 布袋騷」
- * 同 七年正月 「子供 褻美喜名話」
- * 同 同月 「見立三臺台」
- * 同 十一年十一月 「子供 役者五志喜目鏡」
- * 明和元年三月 「平安遊治男娼鏡花」
- * 同 二年三月 「京都寺社内芝居 風流鼓」
- * 同 三年正月 「子供操 役者二つ紋」
- * 同 四年三月 「京都寺社内芝居 三の春」
- * 同 五年正月 「京都寺社内芝居 艶双六」
- * 天明七年正月 「堀東の芝居 役者髻髻子」
- * 文化十二年正月 「大阪道頓堀 東の芝居 独案内」
- * 同 十四年三月 「中芝居 出世道中記」
- * 文政十一年正月 「中芝居 役者舞壹鏡」

- 二冊 大和屋利兵衛板
- 三冊 大和屋板
- 三冊 大和屋利兵衛板
- 三冊 升屋、俵屋板
- 一冊 京都 八文字屋板
- 一冊 京都 子供操芝居
- 一冊 子供芝居
- 一冊 子供芝居
- 一冊 八文字屋板
- 三冊 東都大阪 八文字屋自笑
- 三冊 中芝居 「役者名物合」の広告による
- 三冊 中芝居、子供芝居

これ以外にも時代が下るにしたがって子供評判記を見出すのは容易になってくるが、宝暦六年の「布袋騷」がその嚆矢であることはまちがいないだろう。そしてこの評判記は同時に江戸で出版されたことが割印帳(4)によって確認される。売出し書肆は吉文字屋次郎兵衛となっている。(5)

この年の十一月に十木座は道頓堀の中座で竹田、石井、亀谷の三座をあわせて顔見せをおこなう。子供役者による始めての顔見せである。「布袋騷」には、この興行にさきだって刊行されていることから、子供芝居を大々的に大芝居にのせるにあたっての前宣伝の性格をみることでできよう。六月という刊行時期にもそれをうなずかせるものがある。

体裁は、大芝居のそれと同様のもので、まず役者の目録をのせ、開口があつて後、具体的な役者の芸評が続いている。大芝居の評判記は京都、大阪、江戸それぞれの評判を一冊ずつとし、それを合冊した形態をとつていて、三都を通して流布していた。

上方と江戸の芝居界は役者の行き来その他の交流があり、合冊という体裁はそうしたことから、ある程度の必然性もあつてのことだった。

が、「布袋騷」は芸評の対象が大阪の小供芝居の役者であつて、はなはだ地域的な色彩をもつ記事内容のものである。にもかかわらずこの評判記は江戸でも刊行される。ここにいわば二流芝居の役者といえる子供役者を江戸で紹介するといふことに、どれだけの意味があるのかという問題が生じる。しかも大阪劇壇における子供評判記の江戸刊行はこれ一度に留まらない。翌宝暦七年正月吉日付で、やはり大和屋利兵衛板の「保美喜名話」という子供評判記がでるが、これも江戸で出版されていることが確認できる。(7)とすればこの子供役者が江戸で紹介される何らかの必然性があつたということではないだろうか。

とりあえずこの子供芝居がこの頃大阪において、どのような位置をしめていたかということ明らかにしなくてはなら

ない。「布袋廬」を中心とした評判記の中にその様子を探ってみることにする。

「布袋廬」が載せる子供役者は目録に六十二人、具体的な芸評に取り上げられるのは三十六人である。立役は惣巻軸に柏井森蔵、白極上上吉の竹田吉三郎とひいき上上吉の竹田当吉、その他竹田徳次郎、竹田岩松等を評判する。柏井森蔵と竹田吉三郎の二人の評価はほぼ「同格」としているが、吉三郎の評判のところで「森蔵近年評ばんよぶござれ共、藝のたてを一すぢにいたさず、吉三郎ハ持まへのげいのすぢを立ぬいたしかたゆへ、巻頭にハ吉三郎と極ました」と両者の違いを指摘している。子供の役者の評がこうした芸質の違いまでに及んでいるのは注目されるべきことであろう。

この森蔵に関しては目録に名を挙げた後に「子供かと思ふたりや方々に子持山うば」と記され、また芸評のところでは「夏治 亀谷座の大だて者おとしの功で、かく別な者でござる。『たらい』たのみもせぬ年せんさく何ノの事じや。」とあり、その年齢が子供役者としてはかなり年配であることを知ることができる。

子供芝居と銘打つからには、役者の年齢にはある程度の制限があらうと思われる。下限は芸をさせ得る年齢ということから推して七八歳かと思われるが、上限はいったいどの位までであつたらうか。「撰陽奇観」の宝暦八年の条に「今年元祖中山新九郎頭取にて竹田石井亀谷濱芝居子供役者追々成人に付向後十五歳以上之者出勤非不仕様度 御役所へ頭上指留申候」とあり、大体十五歳ぐらいを目安としてよいのではないかと思われる。

ただそれについては例外もあり、宝暦十一年にでる子供評判記「役者御志喜目録」は従来の子供芝居三座のほかに、中巻で御霊社内の三栴大十郎座、阿弥陀地藏前の荒木与次兵衛座、中芝居の中村藤菊座を、下巻で嵐市松座、柏井森蔵座の役者を評判するのであるが、この柏井森蔵は「布袋廬」の当時、既に子供役者として年配者であることが取り沙汰された

役者である。これはこの頃に森蔵が独立して一座を立て、座本という任も担っていることから年齢としては破格の存在となつていたのであろう。各座には一座を統率するものとして、こうした役者がいたようである。

なお宝暦二年に石井座にいた竹田槌松は六年には竹田座の役者となつてのことから、役者の移動のシステムは大芝居と同様だったらしいことがうかがわれる。

さて演目であるが、「布袋屋」が評判している外題は

石井座 「後三年奥州軍記」四の口、四の詰

「敵討巖流嶋」上の巻、中の巻

「大塔宮曦鑑」三の口、三の詰

亀谷座 「伊勢街道鐵掛松」三段目、四段目

「一谷嫩軍記」三の口、三の詰

「尼御壹由比濱出」二の詰、三の詰

竹田座 「小野道風青柳硯」二の口、三の詰

「鴨神上人五穀雨」使者の場、北山いわやの段

「増御所桜堀川夜討」五段目口、切花扇かんだんの枕

である。すべて浄瑠璃の外題であり、みどり形式になつてゐることは、子供芝居が操の間狂言から出発しているという事情に由来してゐよう。この形態はその後踏襲されていくのである。

これらの演目は何れもそれぞれのハイライトであるが、内容としては子供が演じるにはかなり際どい場面があり、注目されるところである。竹田徳次郎の評判のところ、「鴨神上人五穀雨」の舞台の様子を

それからたへまがつかへをさすり。乳をなで、肝をつぶし。爰はけうかく。爰は天すう。爰はいんばく。爰が極楽浄土じやと。執心きざし。

と伝えるのによつて幼い役者がこの場面を何ら改訂なしに勤めていることがわかる。一方の雲の絶間姫の役の竹田嘉吉のところでは

鳴神に戀の咄して。きをうしなはせ、瀧の水を口から口へふくめ。帯をといて。はだをあためる仕内。見物の心にもなつて見たがよい。たまる物ては御ざらぬ。

と評している。これはむしろこうした濡れ場を子供が演ずるといふ意外性をねらっているのではないかとも考えられる。坂東喜藏のところでも

こう屋手代孫左衛門の役。主人のむすめお染に。祝言させんとむりやりに。二かいへおしやり。下にて悦ばるゝ仕内。又思ひ出して。はな紙をもんで。二かいへほうりやる思ひ入。きつう落がつきました。

と同様な場面にスポットをあてている。つまり年少の者に色事をさせるといふ変態的な企画で観客の関心を集めようとしたのであり、こうした場面を積極的に演目とするのも子供芝居のひとつの特徴といえるのかもしれない。年齢的に中芝居という段階を通り越して、子供芝居に着目した理由はこうしたところにもあると考えられる。

さて次に「布袋懸」の位置付けである。このような評判記が独立して出版されたということは、その時点で既に子供芝居が従来の操り芝居の付属的位置から脱皮していると考えられるのだが、そのあたりの様子について宝曆七年正月刊行の大芝居の評判記「役者真壺筋」がその口上のなかで触れるところである。

竹田亀谷芝居は、是迄からくりをおもにして、子供役者は附り、夫故右芝居の藝品定は、難しい所、近年はからくり斗致、子供役者をおもに立ての興行。

これによって子供役者の芸に重点が推移していることを確認できよう。

この子供芝居はまず低迷状態にあった京都の劇場で多く興行されている。寛延二年の南側芝居は顔見せを座本が水木吉十郎で子供芝居が「物ぐさ太郎」を上演し、翌三年には南側はこの操り芝居が通年興行するのである。

また大阪では続く宝暦元年、中村十蔵と岩田染松座の二芝居が興行していたが、運営がおもわしくなかったのか七月に座本が交替し、翌二年は中村十蔵座一芝居のみの興行となる。

こうしてみるとまず、歌舞伎芝居の衰退という事情から子供操り芝居の進出があり、そこからさらに操り芝居の間狂言としておこなわれていたにすぎない子供役者の演技を、歌舞伎芝居として成長させるべく注目していったのではないかと考えられるのである。

ここに興行上の企画としてクローズアップされ、活性化化した子供芝居はそこに自ずと俳優養成機関としての機能も兼備していったのであろう。事実、子供役者の竹田吉三郎が嵐吉三郎と改名して大芝居の役者になるなどの例が間々みられるようになる。

こうした展開のきっかけとなったのが、先に述べた宝暦二年、大坂の大芝居一興行のみという事態であった。この年の評判記「役者艶庭訓」⁽¹⁰⁾は大坂の評判を行った後で、

頭取罷出て、扱いずれも様へわけて申上げます。当年は御当地芝居の評数^{ひょうすう}もすくなく、各々様御より下され候せんもいかゞと存まする故、此度伊藤出羽掾芝居、子供あやつり狂言、

仮名手本忠臣蔵 四ツ目 九ツ目

丹生山田青海劔 三ノ口 三ノ詰

大塔宮囃鑑 四ノ口 四ノ詰

大三切に仕り、殊の外繫昌にて、評判町中をなりわたる。よせ太鼓も夜の内より打ツ程の大当り。去ル方より望に付、此座の子役衆を評致さふと存まする間、よしあし御遠慮なく御評判願上まする。併此座は位も一流たてまする程に、左様に御得心下さるべし。とうざい〜

と述べて以下、はじめて刊行物に子供役者の名前が紹介される。このあたりから操りと切りはなして子供役者の芸が注目され初めていると考えられよう。子供役者の芸が評判されたのはこれが嚆矢であろうが、始めはこのような大芝居評判記の付録として出発したのである。「役者真壺飭」には宝暦二年のこうした子供芝居の扱いが、当時非難も出たらしいことを伝えているが、その後ややあって、十二年刊の「役者手はじめ」もこの形態を取る。

また宝暦二年の段階では、子供芝居に関する記事は付録という形で、大芝居と一線を画した扱いがされていたのであるが、宝暦七年には子供芝居亀谷座の十木菊松が大芝居の座本として名をあげ、大芝居の評判の中で十木座の役者が評せられることになる。

この十木座は実質は亀谷、石井、竹田の三座が合併したものであり、同評判記は後部にこの三座の役者の惣目録を付載している。がまた前述の如く、子供芝居の評判記が独立して編成される年度もある。

このような、子供芝居を評判するにあたっての形式の曖昧さは、とりもなおさず劇界の中での子供芝居の位置の曖昧さに由縁するのであろう。

ところで子供芝居が大芝居へ進出した宝暦七年は大芝居の評判記が子供役者を取り上げているのとは別に、同じ正月に子供芝居の評判記「見立三舞壹」と「子供褒美喜名話」が出版される。「見立三舞壹」は役者の惣目録で、具体的な評判は「褒美喜名話」三冊がおこなっている。この年いかに子供芝居の興行に力をいれているかが推測されるのである。

以後この三座合併の子供芝居の一座は、八年にも大芝居で興行し、その年の十月には竹田座は京都へ行って興行、九年には亀谷座が上京し、その外にも方々の寺社内で子供繰り芝居がおこなわれていた。⁽¹²⁾

十年十月には石垣町に新芝居が設けられ、亀谷座が興行するといった具合に、子供芝居は大坂京都を歩き来しながら次第にその地位の地固めをし、成長していくのである。

こうした成長過程の中においても、芝居の階級意識といったようなものは失われているわけではなく、「役者五志喜目鏡」(宝暦十一年)の中で、

大三軒の内中村藤菊殿の座は、大芝居の仕組の様に承ります。中芝居の仕組のやうにもうけ承ります。いづれ共定まりませぬ。大芝居の仕組なれば八もんしや殿の方で、致されませぬ。

というように、両者は明確に区別されている。

が、子供芝居が劇壇のなかで安定した位置を持たず、大芝居の小屋で興行したかと思えばまた濱芝居へもどるといった状態が続けつつも、とにかくこの時期に一つの活性化を芝居界にもたらしていることには変わりない。

この子供芝居、操り芝居の中の一部に過ぎなかったものに着目し、大芝居とより関係の拡大を計ろうと企画され、最初に行われた企画が宝暦六年の「布袋齣」の刊行ということになる。

「布袋齣」はさらに大阪でも「藝評改褒美辯名話」と改題して再版されている。⁽¹³⁾子供芝居をとりあげるといふ企画は反響を呼んだのである。こうしてみれば大坂劇壇の新しい方向を紹介するといふところに「布袋齣」と「褒美喜名話」とい

う評判記が江戸で刊行されることの意義をみることができよう。これは歌舞伎が江戸と上方では異質の展開をしながら、一方、お互いの動きには敏感であつたらしい様子をうかがわる出来事といえるだろう。「褒美喜名話」の中で「ひりせう」先伊達の評判はおれはしらぬ本舎布袋麿をよんでごろうしませ」というところに両者を一連の書とする刊行側の態度をよみとれるところから、これらは同じ意図をもった刊行物と考えられるのである。事実、それ以降は江戸における子供評判記の出版の形跡がないことも付け加えておく。

注

- (1) 「役者删家系」宝暦五年刊 三冊 実践女子大学所蔵
- (2) 実践女子大学所蔵「子供 布袋麿」月の巻、花の巻二冊
刊記 宝暦六年子ノ五月吉日
大坂南久太郎町なにわ橋筋
大和屋利兵衛板
- (3) 『歌舞伎序説』守随憲治 昭和十八年 改造社
- (4) 全十一冊中第二冊 国立国会図書館蔵 旧幕府引継文書
- (5) 「布袋麿」は他に早稲田大学演劇博物館蔵と都立中央図書館蔵(花の巻)が管見にはあったが、刊記はすべて同じもので江戸売出しを示唆するものは確認できなかった。
- (6) 「褒美喜名話」宝暦七年刊 三冊 国立国会図書館所蔵

- (7) 同右割印帳による。割印帳には「板元大坂」として大坂屋利兵衛とあるが、こうした名称の書肆は他所で管見に入らなかった。
- (8) 「役者御志喜目鏡」宝暦十一年刊 三冊 早稲田大学演劇博物館所蔵
- (9) 「役者眞瑠筋」宝暦七年刊 早稲田大学演劇博物館所蔵
- (10) 「役者艶庭訓」宝暦二年 三冊 実践女子大学所蔵
- (11) 「役者手はじめ」宝暦十二年 三冊 実践女子大学所蔵
- (12) 四條道場寺内「倭假名在原系圖」

因幡薬師地内「けいせい阿古屋の松」

- (13) 大坂図書出版業組合所蔵「書籍開板御願書控」に

藝評改褒美辯名話以前子供藝評布袋髷と題せしを板行元大和屋利兵衛より申出あり本屋行事にて聞届く
申出年月寶暦六年十一月

とあるによる。

「子供
布袋懸」月の巻一丁オモテ

和袋懸 月の巻
 大坂浪士若狭有月録
 竹田近江大塚屋
 石井花屋極屋
 龜谷豊後極屋
 ▲立役之辨
 ○八立東西介敷必登の八のそ
 撫上吉 竹田三郎 石井屋
 松屋前助 大坂の心のお金屋
 貝上吉 竹田茂吉 日見
 上上吉 竹田法温 竹田屋
 上上吉 竹田岩松 石井屋
 上上吉 坂東森松 龜谷
 澤刺の心お金のあな家

「子供
布袋懸」花の巻二十四丁ウラ



「子供
布袋懸」花の巻二十五丁オモテ

